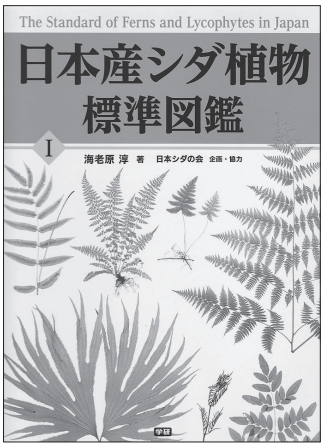
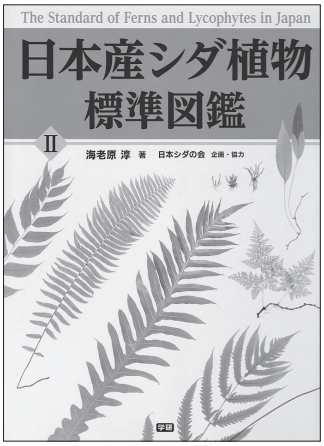
新刊紹介

○海老原淳著・日本シダの会企画協力：**日本産シダ植物の標準図鑑Ⅰ・Ⅱ** A4版．各巻20,000円＋税．学研プラス．Ⅰ巻：2016年7月27日．475頁．Ⅱ巻：2017年4月11日．507頁．





日本のシダ植物図鑑はこれまで数多く世に出た。最近では通称「岩槻シダ図鑑」が1992年に出版されたが，それ以来20数年ぶりの刊行である。この間に研究は大いに進み様々な情報が蓄積されたので，今回の出版は時宜を得たものとなった。著者の海老原淳氏は日本のシダを知り尽くした研究者であり，図鑑を企画し協力したのが，これまたシダに対する思いが熱い人々が集まった日本シダの会である。日本の自生種と雑種の全種（外来種も含む）が解説されている。第一印象は，色彩豊かな図鑑になっていることである（シダは花がないけれど単調にならないよう工夫されている）。前半にある写真部は，着目すべき部位のほか，種ごとの分布図も入って図鑑の40%を占める。後半の記載部は和名の由来，分布，基準産地，倍数性・生殖様式など小見出しごとにまとめられ読みやすい部分と，種の形態と系統樹が一つに組み合わさった独創的な「形態比較表」に分かれている。形態の数値は最大最小値以外に，多くの標本データに基づいた標準偏差値が使われているので，普通のサイズと例外的なサイズの両方がわかるようになっている。図鑑につきものの検索表は科の検索表だけで，種属の検索表はない。その代わりの「形態比較表」は，表を縦に見るとそれぞれの種の特徴を捉えることができ，横に見ると検索に使えるというように工夫の跡が見られる。種の並び順は系統を反映している。ふつうの検索表は少数の形質を2分岐によって順次比較対照するのに対して，本書の「形態比較表」はじっくり比較できる新型の検索表といえる。とはいえ，評者のような旧式の思考回路の持ち主には戸惑いを感じることもある。第Ⅱ部に取り込まれた論文PPGⅠ（2016）では，著者を含む多数の研究者が各科を分担してシダ植物の最新の分類体系を提唱した。最新ではあるが，属の定義などは各研究者にゆだねられたので統一性に欠けるきらいがある。一方，少数の著者の場合だと，すべての群に同等の深い知識を持っていないこともありうる。本著はその辺の事情にも配慮したことであろう。以上のように，本図鑑は情報が最新かつ豊富で『新種』の図鑑というにふさわしい。今後長く利用される図書なので個人でお使いになるばかりでなく学校，図書館，博物館などにも配架されると期待したい。

（加藤雅啓）

［Ⅰ巻について］

本書は最新の日本産のシダ植物図鑑全2冊の1冊目である。

本は，目次，部位，形状などの用語，概説，日本産シダ植物に関する参考文献，シダ植物の科の分類体系比較表，日本産の科の検索表，この図鑑の見方，図版（ヒカゲノカズラ科からシシガシラ科まで），解説（ヒカゲノカズラ科からシシガシラ科まで），和名索引，学名索引からなる。 本文の図版は標本画像，分布図，生態写真からなり，解説は和名，学名，和名の由来，分布，基準産地，生育環境，利用，倍数性・生殖様式，備考からなる。

この図鑑の特徴の1つに，種の検索表の代わりに，雑種も含めた各分類群の形態の比較表がある。表は類縁の近い分類群の比較のため，ほとんど同じような形質であり，どの形質が区別点なのか，探すのに苦労する。従来の図鑑の欠点を補うためにしたことであるが，従来の図鑑の利点を失ってしまった。

鱗片，葉の裂片，胞子，胞子のう群，葉軸の毛等その植物にとって重要と思われる形質には写真が出ている。各種につき光要求度や水分要求度が出ているのは面白い。植物の写真は鮮明で綺麗であり，本当に見ていて楽しい本である。これほどの情報のある本は少ない。ただ惜しむらくは分布図が小さいこと。ルーペを片手に本を読まないといけない。次に，ここ2，30年でシダ植物の学名は相当変わった。学者によって使用される学名も違う事がある。それらの学名からどんな植物かとこの図鑑を引くと，出ていないことがある。最近学名が変

更されたものはそれらのシノニムが出ているが，古く取り扱われたシノニムは出ていない。これはアマチュアや生態学，遺伝学，生理学等の他分野の人には不便なことである。

153頁にヒメミズワラビの分布図があるが，富山県には赤点が打たれていない。筆者らは富山県にも多数分布することを報告している（植物地理・分類研究48：93-96，2000）。標本を30万点以上集めても分布図の作成に完璧という言葉は似合わない。

コケ植物を観察していると，シダ植物の配偶体と思われるものに遭遇する。今後は特徴的な配偶体も掲載してほしいと思うのは筆者のみの欲望だろうか。形態用語には英語も追加されているのは，専門書を読むときに役に立つ。この本はシダに“はまった人”には手放せない良書である。

（鳴橋直弘）

○北川尚史（著）・しだとこけ談話会（編集）：**コケの生物学**　B6判，284頁．2017年1月10日．研成社．1,600円（税別）

本書は，研成社の雑誌『プランタ』に第1号から34号まで連載されたものを1冊の単行本に纏めたもので，コケ植物の総合的な解説書である。

本は，本書の出版にあたり，序章 コケとは何か，第1章 コケと緑藻との関係（緑藻との共通点，緑藻との相違点，コケは緑藻の何に最も近縁か，車軸藻との関係），第2章 コケとシダとの関係（シダとの共通点，シダとの相違点，古生代の化石に見る両者の関係，二次代謝物），第3章 コケが先かシダが先か『羅生門シンドローム』（前進説（新生説），相同説），第4章 コケの生活史（生活史を学ぶことの意義，陸上植物の世代交代，生活史に関係する用語の問題，ゼニゴケの生活史），第5章 コケの有性生殖（生殖器官，雌雄性，受精），第6章 コケの胞子散布（胞子の大きさと数，胞子の放出機構，第7章 コケの栄養生殖（植物体の分割による栄養生殖，再生による栄養生殖，無性芽による栄養生殖），第8章 胞子発芽と原糸体（胞子発芽，原糸体），第9章 コケと水（耐乾性，水の通道），第10章 コケと他の生物（脊椎動物，無脊椎動物，藻類，菌類，細菌），第11章 コケと人生（間接的な関わり，直接的な関わり，環境の指標としてのコケ），補遺（コケ植物の化石における最近の知見（片桐知之），原糸体から得られた近年の形態形成情報（大塩愛子），菌類と細菌類との共生に関する近年の研究（秋山弘之）），あとがき，引用文献，索引からなる。

北極圏に生息するトナカイは，冬の間雪を掻き分けて地表のコケを食べると聞いていた。しかし，この本では，トナカイが食べるのはコケではなく，地衣類であるという。特殊な場所のトナカイを除いて，一般にトナカイは地衣類を消化できるが，コケは消化出来ないという。我々人間は，藻類やシダ植物や種子植物の一部を食べている。しかし，“人間はコケをたべないし，世界中にコケ料理などはどこにもない”と著者はいう。そう言われれば，確かにコケを食べるという話しは聞いたことがない。

コケには地中にジャガイモのような“いも”を作るものがある。第一次大戦中に大量のミズゴケを外科の傷当てに用いられた。乾燥した環境に生えるコツボギボウシゴケは摂氏20℃に保ったデシケーターに60週間入れても，なお生きている。ホンモンジゴケは大量の銅を体内に蓄積し，通常の植物の銅の量の1,000～2,000倍の高濃度である。このためこのコケは銅鉱床や銅汚染の発見に役立つ指標植物であるなど，この本は，筆者には未知の情報が満載である。

著者の北川尚史氏は，京都大学と京都大学大学院で学ばれ，奈良教育大学と奈良産業大学で教壇に立たれ，日本植物学会評議員，植物分類・地理学会会長，日本蘚苔類学会会長などを歴任された。

これほど多方面からコケについて書かれた本は少ない。特に，コケと緑藻の関係，コケとシダの関係，コケの生活史など，これらの重要な部分は丁寧に分かり易く書かれている。コケ植物を勉強しようと思っている人，生物学を学ぼうと思っている学生や院生，コケ植物を利用するためにもっと知りたいと望む方々には打って付けの入門書である。この本は，著者のコケに関する広くて深い見識の感じられる良い本である。

（鳴橋直弘）

○鳴橋直弘（編著）：**ヘビイチゴを調べる**　A5版．230頁＋口絵カラー32ページ．2017年1月28日．認定特定非営利活動法人大阪自然史センター．2800円＋税．

鳴橋氏は長年にわたって植物地理・分類学会の会長などを務めてこられ，会員だけでなく地域でも広く知られた方である。ヘビイチゴ類を研究してこられたことも紹介する必要もないほどで，「鳴橋といえばヘビイチゴ」，「ヘビイチゴといえば鳴橋」を言われるほどこの分野の第一人者である。そんな鳴橋氏が編著者として著したのが本著である。著者は鳴橋氏のほか，富山大学時代の1978年に鳴橋研究室のドアをたたいた杉本守氏をはじめたくさんの方が分担執筆して作られた。したがって，卒論研究，修論研究を中心にまとめられたので，鳴橋氏の活動史の一面を示している。多くの章は共著となっているが，卒論，修論のデータをもとに鳴橋氏自身が執筆したことがうかがえる。31編が約200ページに及び，「ヘビイチゴとは」，「生育地と生活」，「花と繁殖」，「分類と利用」の4部に分けられている。30年以上にわたる息の長い調査研究はヘビイチゴを様々な角度から調べるというものである。本著の「調べる」を私なりに言うとすれば「生活史を調べる」といえよう。本著は生態・分類に関する内容ばかりではなく，薬用などの利用面も触れられている。ヘビイチゴは水田の畔，道端など身近に見られるので，本書を読んで植物を見ると親しみが増し理解が深まるに違いない。ヘビイチゴと同種に見られたことがあるヤブヘビイチゴとの比較を基調に話が展開され，生態・分類データを総合して結局，別種として結論づけられている。冒頭の32枚のカラーの口絵にはヘビイチゴとヤブヘビイチゴの花と果実，送粉者，種子散布者，フェノロジー，生態などがふんだんに取り上げられている。口絵がよき序章となって続く本編へと誘う。身近な植物，里山の植物のことをもっと深く知りたい方にぜひお薦めしたい。載っている図の多くが本誌「植物地理・分類研究」から引用されているので，本学会会員にとってはなお深い結びつきを覚えるだろう。

なお，本書は一般書店で販売されていないので，大阪市立自然史博物館友の会オンラインミュージアムショップで購入できる。著者宛（yjrqx660@ybb.ne.jp）に直接メールで，住所と電話番号を記して申し込めば，1冊2,500円（送料込）で入手できる。

（加藤雅啓）